

最近のクリニックでの出来事

先日、小学生の女の子を持つ母親が、相談したい事があるというので来院しました。診察室に入るや否や、付き添いの方のために用意してある椅子を引っ張り出して私の側まで寄ってきましたので、ただ事ではないと察し母親の話に耳を傾けました。

その母親は、関東地方（横浜？）から放射能を避けるために沖縄に来ているらしいのです。来院した理由は、学校の給食は汚染されているので弁当を持参させる診断書を書いてくれ、ということでした。

「卵も牛乳も飲ませたくないし、水道の水も飲ませたくない」と言うのです。「では、それらを摂取してお子さんに何か症状が出るのですか？」と尋ねると、「今はないが将来の事が心配」と。「それでは自分の子どもの心配はしても、給食を食べている他の子ども達は無視しているのですか？」と尋ねると、「心配しているが誰も私の言う事を聞いてくれない」と不服でした。

学校や教育委員会などに申し込んでも弁当持参を認めてもらえず、診断書があればということで当クリニックに来たということでした。結論として、食べて何らアレルギー反応がないのに、給食を摂らせないと診断書は書けないとお断りしました。

私は母親こそ心が病んでいるように思いましたので、心療内科でも訪ねた方が良いでしょうが、旨を伝えましたが、「もう学校へも行かせません」という捨てセリフで帰って行きました。

言い方が拙かったと反省していますが、その後どうなったか子どもが気がかりです。

そういうエピソードがあった時に、ある雑誌に「子育て四訓」というのが載っていました。

1. 乳児はしっかり 肌を離すな
2. 幼児は肌を離せ 手を離すな
3. 少年は手を離せ 目を離すな
4. 青年は目を離せ 心を離すな

とありました。

乳児期は肌と肌の触れ合いで、守られている、愛されているという安心感に包まれ、その後、成長と共に両親との物理的な距離が離れていても、自分は愛されている、自分は守られているという安心感が常にあるために、自分の世界を広げていくことができるというのです。

しかし、愛は人を守り成長させますが、同時に愛は執着を生むというのです。子どもを守ろうとする愛は、同時に自分の元に留めておきたいという執着を生み、自立しようとしている子どもにとって窮屈であり成長の妨げになるという事です。我が子の成長をじっと見守り、可能性を信じて励まし、手放す事も大事と言っています。

前述の震災を逃れてきた親子は、見知らぬ地で今後どのように過ごしていくのでしょうか。我が子を守る親の愛情は理解できますが、世間を信用しない状態では安心した生活は困難だと思われれます。早く汚染という恐怖心を払しょくし、「なんくるないさ」（何とかなるよ）の大らかな精神を取り戻してもらいたいものです。

（たまなは）